ベーオウルフ（韻文訳二　六六二行―一〇四九行）

枡矢好弘

第十節

かく言い残し　フロースガール王
戦場で指揮をとる王
シュルディング人の守り主は
戦士の一隊従え　広間を去って
后　ウェアルフセーオウのもと
褥の伴のもと歩を運ばんとする
人人は聞く
栄えある王が
グレンデルに立ち向かうため
広間の守護者を任命したと
この守護者
巨大なる怪物見張り
デネ人の君主のために
ただならぬ務めを果たす
イェーアトの王子　ベーオウルフ

六六五

おのが勇武と神の恩寵
ゆめ疑わず
鉄の鎖鎧を脱ぎ兜を取った
えりすぐった鋼の刃
飾り立てたおのれの太刀を
従者に手渡し　武具甲冑の
見張りを命じ　その上で
勇敢なる人
イェーアト人のベーオウルフが
床につく前　語るのは
誇りの言葉
「それがし　武勇にかけ
また　武芸において
グレンデルに引けを取ると思いはせぬ
それゆえ彼奴を刃にかけて
眠りに就かすつもりなし
容易きことであるとはしても

六七〇

六七五

刀で生命奪うつもりはいささかもない
彼奴は勇者の業知らぬ　六八〇
悪事にかけて彼奴の名
天下に轟きおるくせに
それがしに刀でもって打ちかかり
盾を砕く戦の技は身につけず
彼奴もし　武器もたぬ闘い求めるならば
われら二人　夜は刀に手をかけぬ
さすれば　賢明なる神　聖なる主　六八五
それがしにしろ彼奴にしろ
御心にかのうた者に
栄光を授け給うことであろう」
戦の勇者その身横たえ
枕　武勇の人の顔を受く
(31)海行く剛勇の戦士たち　六九〇
多数まわりを取り囲み
広間においた床に沈んだ
この戦士らの誰一人
この地より再び帰り
懐かしきわが家を　また同胞を
あるは又　生まれ育ったわが城市
目にすることになろうとの
期待　胸に抱くものなし

この酒宴の広間でデネ人の
あまりにも多くの者が　惨い死遂げた　六九五
その事実聞き知るが故
(32)だが　神はこの戦士たち
ウェデルの人に
戦いに成功おさめる運命をつむぎ
安らぎと援助を授けた
この戦士たち彼らの敵を
一人の力　他人を恃まぬその者の力によって
完膚なきまで打ちのめす
(33)全能の神　久しきにわたり人類を
支配し給うこと　その理を人は知る　七〇〇
暗き夜　闇を行くもの忍び寄る
この切妻館を守るべき
務めをおびた武人たち
一人を措いてすべての者が夢路をたどる
罪深き暴虐の鬼
かれらを陰のもと
引きずりゆくことかなわずと夢路をたどる
だが　ベーオウルフは目を閉じず　七〇五
敵に対し憤り
憤怒の思いつのらせて
戦いの成り行きを待つ

第十一節

その時グレンデル
神の怒りを身に浴びながら
荒野立ち出で霧立ち込める丘陵の
ふもとを進み歩みくる
この邪悪なる暴虐の徒
高くそびえる館の広間で
人間の誰か一人を
陥れんと目論みながら
雲おおう下をゆき
酒宴の館　金箔をはって輝く
人間の金の館がくっきりと
目に入るところへ進み来た
フロースガール王の館の襲撃
この度が初めにあらず
だが悪鬼の生涯あとにも先にも
かほどの不運　館守護する武人の
かくも強きに遭遇の覚えなし
この悪しき戦士[34]
喜びを奪われたまま
広間のところに進みくる
焼き入れて鍛えた鉄の

七一〇

七一五

七二〇

板にて留めた扉にあれど
悪鬼　両の手で触れるやいなや
瞬時に開く
邪鬼たけり立ち
悪事の他は心中になく
広間の口を押し開く
たちまちにして悪鬼
モザイク模様の床を踏み[35]
たけり狂う心あらわに進み出る
両の眼は炎と見まがう
醜悪な光を放つ[36]
グレンデル広間の中に
数多の戦士　一族の男
一隊の若き武人　みな共に
眠るのを見た
グレンデルの心は笑う
宴の希望わき起こり
恐ろしき怪物
今宵のうちに一人残らずその生命
身体から切り取らんとの
存念いだく
その夜のあとは
もはや人肉食らうこと

七二五

七三〇

許されぬのが彼奴の運命
剛強の人　ヒイェラーク王の縁者は見守る　七三五
この悪鬼その急襲をいかになすかと
怪物は猶予すること心になく
まず手始めに襲いかかるやたちまちに
眠れる戦士ひっ掴み
その武人の身一気にひき裂き
肉に食いつき
血管くわえ生き血吸い
巨大なる肉の塊呑み下す
たちまちのうち
命なき武人の屍　両手両足　七四〇
かけらも残さず食い尽くす
悪鬼なお奥へと近づき
床にある雄雄しき武人を手づかみに[37]
指かっぱ広げ手をさし出だす
敵意はらんだ企みに　七四五
この雄雄しき人すぐさま応じ
腕で支えて身を起こす
罪の擁護者たちまちにして思い知る
この世界　地の隅々で
かほどの力いまだ知らずと
心中悪鬼恐れなす　七五〇
すぐさま逃るは難きこと
彼が心は逃れたく
隠れ家へ逃げ帰りたく
悪魔仲間の居場所を思う
その場の己が在りよう
人生の日日において
いまだ知るものにあらず
剛勇の人　ヒイェラーク王の縁者はその時　七五五
床につく前語った言の葉思い出し
すっくと立って
指も折れよと
悪鬼を固く締めつける
巨大なる怪物　背を向けんとし　七六〇
雄雄しき人さらに踏み込む
悪名高きこの巨人
折あらば相手の手
すり抜けてこの場を逃れ
沼地の隠れ家
目指さんとの思惑あり
雄雄しき武人が怒りをもって
握り締める指の怪力
悪鬼はこのとき思い知る
この危害なす暴虐の徒　これまでに　七六五

牡鹿館に向かい来たったもののうち
悔やむべき遠出であった
従者らのいこいの広間に轟音響く
すべてのデネの人人に
城市に住む者に
豪胆の人ひとり一人に　戦士らに
広間の出来事　荒荒[39]しき宴となった
この二人　激怒する　館の守人[40]猛りたつ
館に轟音とどろき渡る
酒宴の広間　美麗なる館
荒武者たちの業に耐え
大地に崩れ落ちぬのは　大いなる不思議
だがこの館　内外ともにしっかりと
鍛冶の匠の技をもち
鉄の帯にて固めてあった
耳にする噂によれば
怒れる二人の闘いの場は
黄金で飾った
蜜酒を汲むあまたの床机
床からはずれ飛び散ったとか
宴の広間　見事なるこの広間
角を飾った酒宴の場
火に包まれて炎の中に

七七〇

七七五

七八〇

呑み込まれるのでないならば
何人といえ　いかなる手段用いても
破壊することあたわず
いかなる技に頼ろうが
打ち砕くことかなわずと
シュルディングの評定人
この時までは思い居る
覚えない物音聞こえ
デネ人たち身の毛がよだつ
神に手向かう邪鬼　地獄の虜囚
その悲痛の叫び
悍ましき歌の調べを
勝利なき歌の調べを
傷嘆くうめき声を
壁越しに聞く者すべて
一人ひとりが怖気づく
その当時この世において
力において勝るもの他になき武者は
この怪物しっかと押えた

七八五

七九〇

第十二節

戦士たちを守護する武人

いかなることがあろうとも
死の客人を
生かして放つつもりなし
この妖怪の生命ある日日
何人かにとり
益あるものとは思われず
ベーオウルフに従う数多の戦士
伝家の宝刀抜きはなつ
叶うことなら彼らの主君
名高き王子の御生命
わが手で守り奉らんと
だが彼らは知らず
彼ら勇敢なる戦士たち
戦に加わり四方八方切りつけて
敵の魂　奪わんと思うとき
選りすぐった刃とはいえ
いかなる太刀も
悪鬼の身体に触れえぬことを
この妖魔　魔法によって
勝利なす武器　いかなる太刀も
役たたぬ物にしていた
この日この世でこの邪鬼がなす
生命との別離

七九五

八〇〇

八〇五

惨めなるものとなるべし
幽界の魂魄は
遥かなる旅をして
幽鬼たち支配するもとへと
赴く運命であった
いままで非道の行いにより
人類を幾たびとなく苦悶の淵に
落とした悪鬼
神に反目した妖魔
生命を覆う己が身体
覆いの用をなさぬこと
ここに至って思い知る
ヒイェラーク王の血縁のもの
この勇者
悪鬼からその手を離さず
両者とも相手に生命ある間
敵愾の心なくさず
恐ろしきこの妖鬼　手傷に苦しむ
肩は肉さけ口開き
腱引きちぎられ
(41) 骨つなぐ肉割れる
戦の誉れはベーオウルフに
グレンデル致命的なる深手おい

八一〇

八一五

八二〇

(42)水したたる崖のふもとを
快楽なき棲家を求め
逃げ延びてゆかねばならず
己が生命の終わりが来
この世に生きる日の数が
今尽きること　ますます定かに
悪鬼は悟る
この死闘　デネ人みなの願いを叶う

遠来の人　賢明にして心強き人
フロースガール王の館の浄め
このとき果たし
暴虐から館を守る
一夜の働き　勇気示した行いに
勇者の心満ち足りる
イェーアト人をたばねる王子
デネ人に誇った約束成し遂げた
デネ人がこれまで耐えたすべての苦悩
酷悪の所業がもたらす悲しみを
抗うすべなきがため
忍ぶほか道なき苦悩と悲しみを
ささやかならぬ懊悩を
勇者は癒す

八二五

八三〇

勇武の将がグレンデルの手
腕と肩　鉤爪ともに
(43)切妻破風につるしたその時
戦の結末　疑う余地なし

第十三節

風聞により知るところ
褒賞さずかる館のあたり
朝になり　戦士たち数多集まる
さらには部族の領袖たち
驚異の業を見　さらにまた
憎むべき悪鬼の痕跡見んものと
近くよりまた遠き方より
遠路はるばる集いくる
邪鬼　戦に破れ
意気阻喪して館を離れ
やがて死すべき運命をもって
水の妖怪棲む湖へ落ちてゆき
生命の痕跡　血痕を残したさまを
敗残の恥さらした悪鬼の足跡を
見た者は何人であれ
殺鬼の生命との別れ

八三五

八四〇

八四五

憐憫の情を覚えず
湖水の水　血で煮えたぎり
恐ろしき波の渦　みな
滾る血のりと混ざりあい
(44)闘いの血潮で水面　波立ち騒ぐ
楽しみ奪われ沼地の中の隠れ処で
生命手放し異教の魂放つとき　八五〇
死の運命を負うもの姿を消した
地獄がその身
その場で受け取る

戦士たち
高齢の友　多くの若者たちもまた
湖水訪れ
馬上にあって高ぶる思いを胸に抱き　八五五
心はずませ白馬を駆って帰りくる
ベーオウルフの武勲
道すがらみな口口に語り合う
多くの者が幾たびも言う
南においても北にあっても
大海二つが囲むところ
広大な大地の上　大空の広がりのもと　八六〇
盾もつものの何人も

この人に勝るものなし
王国の統治に値する人他になしと
だが彼ら　主君フロースガールを責めるにあらず
王は優れた君主であった
戦陣にその名はせた武人たち時には襲歩
道　早駆けに優ると知られ　八六五
平らかと見えるところで
鹿毛を走らせ競い合わせる
また時に　王の戦士のひとりの者
詩行そらんじた誇れる者
おびただしき古き伝承記憶する者
韻律正しく
あらたな言の葉つなぎ合わせた　八七〇
巧みな技を用いつつこの人は始める
ベーオウルフの偉業を語るみごとな朗吟
変化に富んだ言葉でつづる武勇にかなう物語
(45)この詩人は　ウェルスの息子　シイェムンドにつき
聞き知ったことすべてを語る　八七五
勇気ある様　数数の不思議なことども
遥かなる旅　争いのこと
血をみる行為　宿怨のこと
これらのことをウェルスの息子は
戦場の友　甥のフィテラに語って聞かせる　八八〇

そのフィテラを除き何人も
人の子のしかとは知らぬこれらのことを
この詩人が吟じてみせる
シイェムンドとその甥フィテラ
戦においていかなるときも得がたき味方
巨人族の数多のものを
刀でもって打ち倒す
シイェムンドの栄光
死して後耀耀と輝きわたる
果敢に戦い
宝物収める庫守る竜退治したゆえ
貴人の子は灰色の岩のもと
フィテラその場になくただひとり
大胆不敵の行為に及ぶ
王者の鋼　鉄の刃は
鱗きらめく竜を貫き岩肌に立つ
竜　必殺の太刀に斃れる
この手ごわき勇士　ウェルスの息子
武勇によって財宝を
わが物となし船に積む
輝ける宝を船の懐深く運び込む
竜は己の熱にとけた

八八五

八九〇

八九五

シイェムンド　戦士の庇護者は
デネ人の古き王ヘレモード
この王の力と勇気　戦う勇気が果てた後
勇ましき振る舞いにより
危難を求めさすらうものの最高者とて
数多の国にその令名
ひときわ高く轟いた人
この武人　剛勇によりその昔かくも栄えた
ヘレモード王　巨人族の中にあるとき裏切られ
敵の手に落ち速やかに逝く
怒涛となって押し寄せる悲しき思い
あまりに長く王を蝕み
邦民にとりまた貴人すべてに
ヘレモード心痛の種となる
過ぎ越し日にも幾多の賢人
豪胆なる王の放浪嘆き悲しむ
賢者たち　窮状の打開王に頼り
父君のあと御子が継ぎ
民草治め財宝と砦を支配し
英雄たち住まう王国
シュルディング人の祖国を治める
国の繁栄期したゆえ
ヒイェラーク王の縁者ベーオウルフ

九〇〇

九〇五

九一〇

人みなにとり友垣にとり
いっそう親しきものとなる
だがヘレモードは悪のとりこに

時折たがいに先を争い
馬上の武人砂ぼこりの道　馬を駆る
時に　夜はあけはなち日が天翔ける
強き心の幾多の戦士
この世の不思議わが目で見んと
高くそびえる館に向かう
徳高くしてあまねく知られ
栄光に輝く御方　宝物殿の守り人
王自らも多くの侍臣を従えて
后の閨を出でたまう
后は王に付きしたがい
侍女の一行引きつれて
蜜酒の館にいたる道を踏む

第十四節

フロースガール王
館について階にたち
金箔輝く切妻の屋根見上げられ

九一五

九二〇

九二五

グレンデルの手　目にしてのたまう
「この眺め今見ることを
ただいまこの場で
全能の神に謝す
グレンデルの幾多の暴虐
悪鬼のもたらす幾多の苦難
余はこれまで耐えた
栄光の守り主　神
いつのときにも奇跡をなされる
次から次へと
わが長らえた人生で生命あるうち
この苦難から救われる日の来ることは
先ほどまでは思いもよらず
他に例をみぬこの館
戦いの血にまみれ血潮にぬれる
あの苦難　賢者たちの胸を貫き
誰ひとりこの民草の要塞を
敵の手から悪鬼から悪霊どもから
守ること可能なりとは予想だにせず
ひとりの武人この時に
主の力を借り成し遂げた
われらすべてが己の技で果たせぬことを
実に　かかる男を人類に

九三〇

九三五

九四〇

授けた女性　生きてあるなら
産褥の床にあるとき
永久なる神の恩寵うけたこと
語るであろう
さて何人にも勝る人
ベーオウルフよ
余は心中そなたを
息子とおもい愛しむ
あらたなるこの縁者のえにし
この後心に刻むべし
余の意のままになるもので
そなたにとって望みの品
この世において何ひとつ
そなたの手に入らぬものなし
余はこれまでに幾たびとなく
そなたに敵わぬ勲功に
そなたに劣る戦士にたいし
戦にのぞむその場の勇気
そなたに及ばぬものに対して
褒賞とらせ栄誉を授けた
そなたは自らその行いで
(48)栄光をとわに生命あるものとなす
全能の神がこの後そなたに対し

九四五

九五〇

九五五

この度のこと報われんこと希う」
エッヂセーオウの子ベーオウルフはいう
「お役に立ちたき思いから
われら妖怪の力にむかい敢然とたち
彼奴と戦いこの勇ましき働きなした
(49)鱗で装う仇敵の息絶えた様
グレンデルの全身を
お目にかける所存であった
しっかと掴み速やかにその妖怪を
死の床に縛り上げんとの思いをもった
その体抜け出ることがないならば
わが手の中で瀕死のあがきを見せたはず
彼奴を押えおくこと
主の御心にかなわぬゆえ
逃れゆくのを止めるあたわず
死を賭す敵しっかりと
掴みおくことかなわず
その敵逃げゆくときの強きこと
わが力をもって防ぐすべなし
だが彼奴己が生命を守るため
手と腕と肩置き去りにした
しかしその時この惨めな生き物
安らぎを得ることあたわず

九六〇

九七〇

この忌まわしき暴虐の徒
その罪業の償いに
やがて生命を落とすもの
傷の痛みが疼きもたらす枷となり
捉えて固く締めつける
罪に穢れたこの者は
栄えある神の定める罰が
いかなるものか
大いなる裁きの下るを
待たねばならぬ」
エッヂラーフの息子はこのとき
口数少なく
丈夫が力づくにてもぎ取った手
悪鬼の指を貴人たち
屋根の高みに見上げるときに
勲かたる誇りの言葉
昨日[50]の多弁もはやない
破風にかかる戦士[51]の指の
一つひとつは先端が
爪のところが
鋼鉄そのまま
奇怪なる釘　魔界の鉤爪
人人みなの語るによれば

九七五

九八〇

九八五

剛勇の人びとが持つ
歳旧りた業物とてもこの鬼を
斬りつけるのは難しきこと
この怪物の戦で鍛えた
血に染まる手
その力萎えさせるのは難きこと

九九〇

第十五節

さて　速やかに命下る
牡鹿館を民よ飾れと
男も女も多くの者が
酒宴の広間
客人もてなす広間の準備整える
金糸織り込むつづれ織
見る者の驚嘆さそう多くの絵図が
壁にきらめく
輝く館　内側を鉄の帯にて締めたもの
傷み激しく　蝶番ははじけ飛ぶ
屋根のみ無傷
悪しき行為の罪にまみれた怪物が
生命あきらめ宙を泳いで逃げ帰るとき
屋根　何ひとつ傷つかず

九九五

一〇〇〇

死を免れるは難きこと
試したき方　試されよ
魂もつもののため
地に住むもの
人の子のため整えられたあの場所を
生命を包む身体が死の床に縛られて
この世の生の宴のあとの
眠りにつく場所
必然の運命によって赴く場所を
人は求めて行かねばならぬ

一〇〇五

さてヘアルフデネの御子
フロースガール王
広間に出御のときとなる
王みずからが望まれた
宴の席のご臨席
かつての威厳取り戻し
これほどまでに多くの人が
財宝賜る人のまわりに集い来るのを
いまだ聞き及ぶことはない
名声赫赫たる人びと
床机に座して宴を楽しむ
彼らのなかで王とその甥

一〇一〇

一〇一五

たけき心のフロースガールと
勇猛の人フローズルフが
高くそびえる広間において
礼儀正しく蜜酒の
酒盃重ねる
牡鹿館は朋友たちでみち溢れ
この時いまだシュルディング人
裏切り行為に走ることなし

ヘアルフデネの御子[52]はこの時
勝利の褒賞　ベーオウルフに授け給う
金糸でつづる御旗が
装飾ほどこす戦の旗が
兜が　また鎖鎧が
世に聞こえた高直の太刀が
多くのものの見る中で
英雄のもと運ばれる
ベーオウルフは広間において
杯を受け酒盃を重ねる
戦人の面前で
恩賞の品惜しみなく賜ることに
ベーオウルフ恥じらい示すは
無用の遠慮

一〇二〇

一〇二五

黄金で飾った四種の宝物
これほどまでに親しげに
エールの席で授けることを
多くの人がなしたとは
まだ聞き及んだためしなし
兜のいただき　その周縁に
金属の板　巻き締めて
頭をおおう防具とする
それゆえ兜は
盾もつ戦士が敵軍迎え
進み行かねばならぬ時
鑢をかけて仕上げた業物
戦塵の嵐で鍛えた太刀にても
激しい損傷受けはせぬ
武人たちを守護する御方　一〇三〇
この時命じる
金で飾った馬勒をつけた
八頭の馬　囲みの中に
広間のうちに引き入れること
なかの一頭　宝玉飾る鞍をおく
装飾の技見事なる鞍をおく
その鞍は大王の戦場の座
ヘアルフデネの御子フロースガールが
太刀交えんとするとき座したもの
刃にかかった者たちが斃れゆく中
令名高き王の勇気は
先陣にあり萎えるを知らず
イングウィネの異名もつデネの人人
このデネ人を守護する御方は
心して用いるべしと命じつつ
馬と武器のいずれをも
ベーオウルフに譲り与える
この通り断固たる決意をもって
英雄たちの宝庫の守護者
令名たかき君王は　馬と宝で
戦いの嵐制した労に酬いる
この褒賞の下賜の品品
正しきに従い真実を
語らんと欲する者の後のそしりを
断じて受けるものでなし　一〇四五

〈注〉

(31)　海行く戦士　原文では一語であり、「ヴァイキング」を指す場合もある。ここは、ベーオウルフに従ってイェーアトから船で訪れた戦士のことであるが、当時航海は命がけの大仕事であった。「海行く戦士」とは、航海をしてその過酷な状況を克服してきた不撓不屈の戦士のこと。当時の航海の

一〇四〇

様子は、古期英語の詩『さすらい人』、『海行く人』に見事に描かれている。

(32) 事件を叙述しながら、神の定める運命が述べられる。いわば事件と同時進行で運命が語られることになり、結末が前もって知らされる。

(33) Chickering (1977, 269) によると、キリスト教化する以前のアングロサクソン人は、今日のような「運命という超自然的な概念」をもたず、現実の生を送るにあたって起こるであろうことが運命であり、運命とは、成り行きに従って「なるようになる」ものであった。この成り行き次第の運命を定めるのが、ここでいう「神」であると思われる。

なお、これも Chickering にしたがうと、彼らは、死後の世界なるものを信ぜず、後世、人（特に詩人）の口に上る名声のみを尊しとした。「運命」に立ち向かう力を発揮できるのは、名声を求める雄々しき心による。

(34) グレンデルは、しばしば、戦士の扱いを受ける。ただの怪物退治ではなく、勇者と勇者の闘いとすることによって、前注で述べた名声を受けるに足る争いとなる。

なお、次行の「喜びを奪われたまま」は、グレンデルが勝利の喜びを得られぬさだめにあることを述べる。注(32)を参照。

(35) Crossley-Holland (1982, 87) の現代語訳にしたがう。

(36) 醜悪な　「恐ろしい」という意味の語が予想されるところ。Chickering (1977, 398) は、緩叙法の例であるとする。

(37) 原詩は、「手づかみにした。……手を伸ばした」となっている。動作の順序としては逆になる上、詩の文脈上は「手でつかんだ」証拠はないので、「手づかみにしようとして手を伸ばした」とする訳者もある。また、Wrenn (1953, 198) のように、原詩の単純形を進行形相当とする人もある（"he was in the act of seizing with his hand"）。しかし、原詩のように言うほうが迫力があることは否めない。しばしば同じ意味内容が表現を変えて繰り返されることを考えるなら、ここもその一例であって、包括的に述べておいて、追いかけるようにより細かい描写をしたと取れないこともない。あるいは、そのような意図はなくても、即興の朗吟であったとすれば、表現の順序が前後逆になることもありうるし、また、脈絡の緊密性が甘くなることもありうる。日常会話でしばしば起こる現象であることを考えるなら、理解できるであろう。拙訳では、あえて原詩の順序に従い、曖昧なままとした。

(38) 原詩には「手」とあるだけだが、多くの訳者と同様、「指を広げた手」とした。

(39) Chickering (1977, 93 & 310) に従う。

(40) 館の守人　グレンデルは第二節に歌われたように、一時は牡鹿館の主となっていた。それが「館の守人」といわれる所以である。『言語と文化』第三号掲載の拙訳参照。したがって、ベーオウルフとあわせて、「館の守人」は二人いることになる。

(41) 骨つなぐ肉　原語は「骨」と「門・掛け金などドアを固定するもの」を意味する二語をつないだ複合語。通常「体」を意味するが、ここは「筋肉」のこと。四頁上段八行目の「肉」も、原語は同じ。

(42) 水したたる崖　原詩は「沼地である崖」（「沼地」・「傾斜」を意味する二語をつないだ複合語）。スコットランドのハイランド地方にあるような、シダが生い茂り、そのあいだを多数の細い流れをつくって水が落ちる山の斜面のようなところをいうのであろう。

(43) 切妻破風につるした　原詩には「大きな屋根の下に置いた」とあるだけで、屋内か屋外かの区別も記されていない。しかし、Wrenn (1953, 199-200) がいうように、入り口付近の外壁と考えるのが自然であろう。Alexander (1973) にならい、「切妻破風」をとった。

(44) 闘いの血潮　原文は、「刀」と「血」を意味する語を組み合わせた複合語。しかし、ベーオウルフとグレンデルの闘いは、素手で行われたので、「闘いの血潮」とした。

(45) ここで本筋とは関係のないシイェムンドとヘレモードの挿話が入る。挿

話の終わりでベーオウルフと対比させてベーオウルフの人柄を浮き立たせる役割を果たすが、原詩七六七行のあたりから（拙訳五頁上段三行目以下）、周囲の状況を描写をしてグレンデルとの闘いの様子を際立たせているのと同じ手法である。シイェムンド・ヘレモードという固有名詞は当時の人々には、聞くだけでピンと来たのであろう。聴覚に頼った韻文の鑑賞であることを考慮するなら、その効果は大きかったものと思われる。

(46) 鱗きらめく　原詩には、「見事な、壮麗な、驚くべき」などを意味する語が用いられている。Chickering (1977) にならい、「鱗きらめく」とした。

(47) 「序節」（『言語と文化』第三号、二頁下段一九行と二〇行）にいう「統べる者なく国民が／なめた辛苦の長い歳月」は、この行以下でうたわれていることを指す。

(48) 注(33)に述べた世界観からすれば、「永遠の栄光」は最高の栄誉である。

(49) 鱗で装う　Chickering (1977) の訳に従う。

(50) 昨日の多弁　第八節（「ベーオウルフ韻文訳　一　—六六一行まで」『言語と文化』第三巻一一頁）参照。

(51) 注(34)参照。

(52) 御子　写本には「刀」を意味する語がかかれているが、「子供」を意味する語の誤記とする説が一般的なようである。しかし、Chickering (1977) のように sword-son とするのもあり、「懐刀」の意であったかも分からない。いずれにしろ、文脈からフロースガールをさすことに疑いの余地はない。ここでは、一応通説にしたがった。

「ベーオウルフ（韻文訳一　—六六一行まで）」『言語と文化』第三号の訂正と加筆

三頁下段　一四行　御船 → 御胸

注(16)末尾加筆　ただし、アングロ・サクソン時代に面頬のついた兜がなかったわけではない。詩人が詩作当時の風俗を取り入れていたのであれば、「面頬のついた兜」は登場することになる。現に、一二頁上段二二行目にある猪の像をいただく兜は、ダービシャで一八四八年に、七世紀ノーサンブリア王国のものと思われるものが発掘されている。

参考文献

Alexander, Michael (trans.). 1973. *Beowulf: A Verse Translation.* Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books.

Bessinger, Jr., J. B. (read by). 1996. *Beowulf.* Caedmon Audio. New York: HarperCollins Publishers, Inc.

Britannica CD-Rom, 1997. *Britannica CD Version 97.* Encyclopaedia Britannica, Inc.

Chambers, R. W. 1952. *Beowulf with The Finnesburg Fragment.* Edited by A. J. Wyatt. New edition revised with introduction and notes by R. W. Chambers. Cambridge: At the University Press.

Chickering, Jr., Howell D. (trans.). 1977. *Beowulf: A Dual-Language Edition.* Anchor Books. New York; London; Toronto; Sydney; Auckland: Doubleday.

Crossley-Holland, Kevin (ed. & trans.). 1982. *The Anglo-Saxon World.* Woodbridge: The Boydell Press.

Fujiwara, Yasuaki (藤原保明). n. d. 『古英詩の世界』『言語文化論集』五〇号別冊。筑波大学現代語・現代文化学系。

Hall, J. R. Clark (ed.). 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary.* With a supplement by Herbert D. Meritt. Toronto: University of Toronto Press in association with the Medieval Academy of America.

Harrison, Mark & Gerry Embleton. 1993. *Anglo-Saxon Thegn 449-1066AD.* Warrior Series 5. Reprinted 1997, 1998. Oxford: Osprey Publishing Ltd.

Hasegawa, Hiroshi (長谷川　寛) (trans. & annotator). 1990. 『ベーオウルフ』怪物破壊魔（グレンデル）退治の巻(1)。東京：成美堂。

Hazome, Takeichi (羽染竹一) (ed. & trans.). 1985. 『古英詩大観―頭韻詩の手法による―』東京：原書房。

Kennedy, Charles W. (trans.). 1940. *Beowulf: The Oldest English Epic.* Translated into Alliterative Verse with a Critical Introduction. First issued as an Oxford University Press paperback, 1978. Oxford; London; New York: Oxford University Press.

Klaeber, FR. (ed.). 1950. *Beowulf and the Fight at Finnesburg.* Lexington, MA: D. C. Heath and Co.

Nagano, Shigeru (長埜　盛) (trans.) 1967. 散文全訳『古英詩　ベーオウルフ』附　フィンネスブルグ争乱断章。東京：吾妻書房。

Ōba, Keizō (大場啓蔵) (trans.). 1985. 新口語訳『ベオウルフ』改訂版．東京：篠崎書林。

Oshitari, Kinshirō (忍足欣四郎) (trans.). 1990. 中世イギリス英雄叙事詩『ベーオウルフ』岩波文庫　赤三五-一．東京：岩波書店。

Sato, Noboru. 1988. *An Interlinear Beowulf.* The Complete Text Edited, with the Interlinear Verbal English Translation and Interlinear Grammatical Note for Each Word, and the Opposite-Page English Translation, and with a Table of the Royal Genealogies Appended. Tokyo: Language Press.

Suzuki, Shigetake (鈴木重威) (ed.). 1969. *Old English Poetry Beowulf.* 東京：研究社出版株式会社。

Sweet, Henry. n. d. *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon.* Impression of 1953. Oxford: At the Clarendon Press.

Tuso, Joseph F. (ed.). 1975. *Beowulf: The Donaldson Translation, Backgrounds and Sources, Criticism.* A Norton Critical Edition. New York; London: W. W. Norton & Company.

Underwood, Richard. 1999. *Anglo-Saxon Weapons and Warfare.* Brimscourt Port Stroud, Gloucestershire: Tempus Publishing Limited.

van Kirk Dobbie, Elliott (ed.). 1953. *Beowulf and Judith.* New York: Columbia University Press.

Wrenn, C. L. (ed.). 1953. *Beowulf With the Finnesburg Fragment.* London: George G. Harrap & Co. Ltd.

Wyatt, Alfred J. (ed.). 1962. *An Anglo-Saxon Reader.* 10th impression. Cambridge: At the University Press.